# 古墳時代中期における集落の動態と古墳の変遷

小池　寛

## 1．はじめに

一般的に古墳時代の研究は、前方後円墳に代表される墳墓の調査がその礎をなしたといっても過言ではなく、古墳築造の背景にある集落址の研究は、今なお、十分な進展をみていない。その要因としては、まず、古墳の発掘調査では、発掘を行う調査地が、古墳のどの部分に位置するかを明確に認識することができ、その調査成果を古墳全体のなかで的確に評価できる点があげられる。しかし、集落址調査の場合は、発掘調査の地点が、集落全体のどの部分に該当するかを明確な根拠をもって判断できない点にある。また、古墳の調査では、発掘調査によって検出した遺構の性格を位置関係や出土遺物から容易に想定することができるが、集落址の場合、検出遺構の機能などを位置関係や出土遺物から容易には想定できない点などがある。

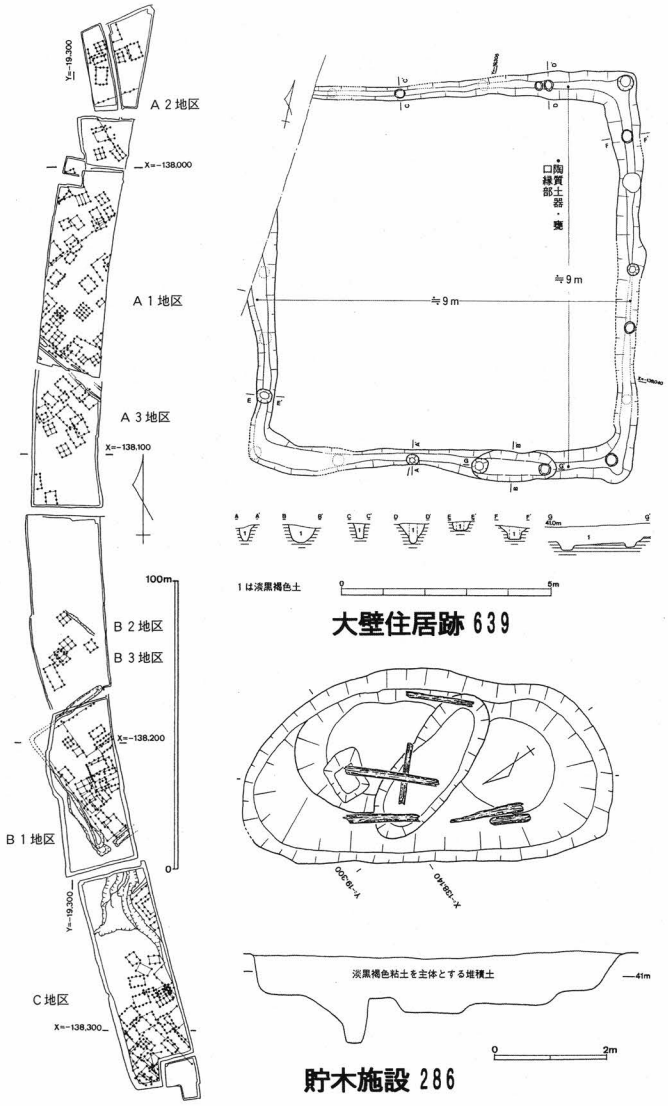
本稿では、以上の点をふまえたうえで、古墳時代中期集落の動態と古墳の変遷について、京都府南山城地域、乙訓地域に中心に述べるとともに、亀岡盆地の集落遺跡について紹介することを目的としている。

## 2．古墳時代中期集落の典型的事例である精華町森垣外遺跡の概観

近年の発掘調査により、京都府南山城地域、乙訓地域、南丹波地域では、古墳時代集落の調査事例が増加している。ここでは、古墳時代中期集落の典型的な事例である精華町森垣外遺跡について概観し、問題点の指摘を行う（第１～４図）。

森垣外遺跡[注1]で検出した掘立柱建物跡群は、総計119棟である（第１図左）。時期的には、柱穴653から陶邑編年ＴＫ216型式に比定できる甕が出土しており、集落形成期を同時期に設定することができる（第２図上）。しかし、最も掘立柱建物跡が増加する時期は、陶邑編年ＴＫ23～47型式併行期である（第４図）。

一方、Ｂ１地区では、一辺46mの囲繞施設内に大型掘立柱建物跡群が造営されていることから、集落内には３ヵ所に囲繞施設が存在し、一般の居住空間とは隔絶された様相を窺い知ることができる。区画溝上では陶邑編年ＭＴ15～ＴＫ10型式併行期に比定できる竪穴




第１図　精華町森垣外遺跡（検出遺構）

式住居跡を検出しており、区画溝によって囲繞された居住空間は、当該時期に意図的に解体されたと考えることができる。

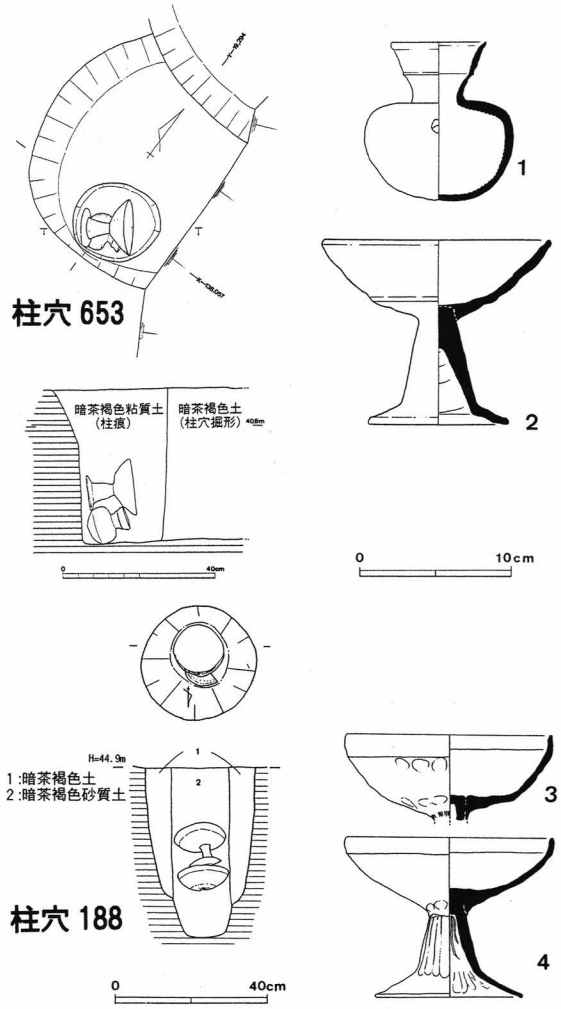
森垣外遺跡では、３棟の大壁住居跡を確認している。構造的には基礎布掘り溝が方形に全周する大壁住居跡639（第１図右上）と平面プランが長方形を呈し、隅部で溝が断絶する建物跡に分類できる。大壁住居跡が朝鮮半島起源の建築様式であることは、朝鮮半島内の調査事例の増加などにより明らかにされおり、技術系渡来人の存在を想起させる。

なお、同遺跡の発掘調査では119棟の掘立柱建物跡を検出しているが、建物を構築する際に不可欠である柱材の確保と深くかかわる遺構として、貯木施設286（第１図右下）がある。ここからは数本の丸太材が出土しており、用材を強化する目的で、土坑が掘削され、建築用材が一定期間、水漬かりの状態で備蓄されたと考えられる。また、森垣外遺跡では、完形の土器を埋納した柱穴（第２図）を検出している。柱穴653では、須恵器の甕と土師器の高杯、柱穴188では故意に脚部を欠損させた土師器の高杯と完形の高杯が出土している。一般的に掘立柱建物跡は、縄文時代や弥生時代にも存在するが、その場合、集落内の共用施設である場合が多い。しかし、掘立柱建物跡が主要な居住施設となって集落を構成する事例は、畿内及び周辺域においては、古墳時

代中期以降であることが把握されている。おそらく、柱穴への土器埋納行為は、一部の集落において掘立柱建物跡が居住施設として多用される古墳時代中期以降にひろがりをみせると推測される。(注2)

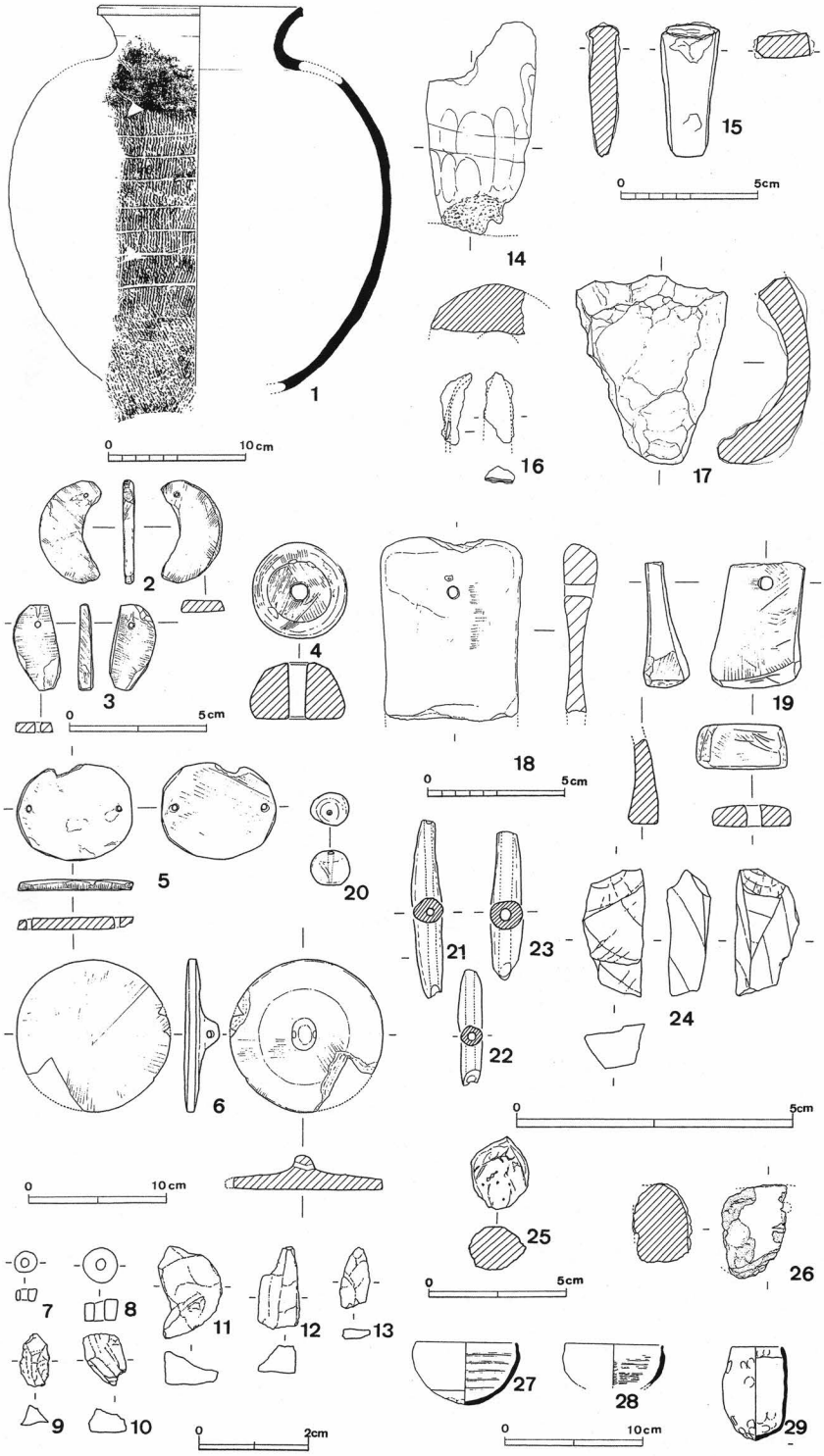
一方、森垣外遺跡では、朝鮮半島から搬入された陶質土器が多数出土している。完形率の高い縄蓆文土器(第3図1)や破片資料の出土は、概ね全地区に広がりを見せている。韓式系土師器の出土も注目される。

調査区全域で出土する遺物として勾玉形(第3図2)、剣形(同3)、紡錘車(同4)、有孔円板(同5)、精巧な鏡形(同6)、臼玉(同7・8)などの石製模造品がある。また、滑石原石(同9～13)も多く出土していることから当該遺跡において製作された可能性が高い。石材種から紀伊産の滑石である。なお、軽石や後述する製塩土器にも紀伊から搬入された資料もあり、交易によって滑石の原石がもたらされ、集落内で生産された遺物群である。(注3)

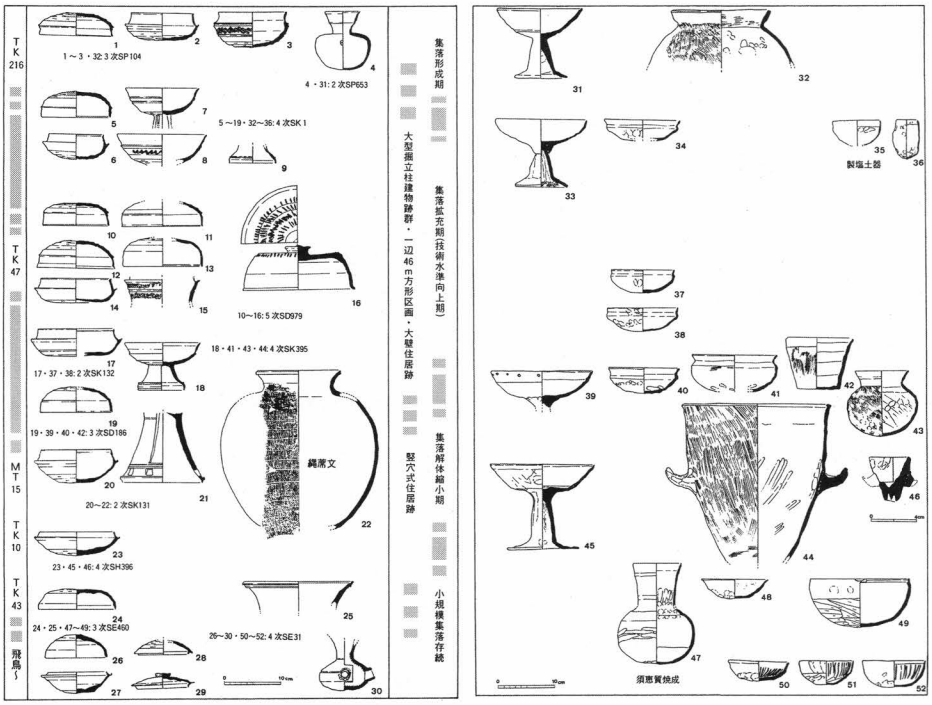



第2図　精華町森垣外遺跡（検出遺構及び遺物）

一般的に古墳時代中期の技術革新には、鉄の原材料確保から製鉄、鍛冶による工具(同15・16)などの作製が大きく影響したとされる。それらの工程では、鉄滓が多く生じるため、集落内の鉄滓出土は、鍛冶などが行なわれたことを示す遺物として認識されている。当該遺跡においても全地区から鞴羽口(同14)、鉄滓や椀形鉄滓(同17)、が出土し、焼土坑も検出していることから、集落内で鍛冶が行なわれていたことを推測させる。鉄製工具を集落内で作製する技術の定着は、生産力向上につながり、周辺域では見られない先進的な技術をもった集落へと変貌を遂げていく重要な契機ともなったのであろう。なお、鉄製工




第３図　精華町森垣外遺跡（出土遺物）




第4図　精華町森垣外遺跡（土器変遷図）

具の普及により、刃部を研磨する必要が日常的に生じる。通常、出土する砥石の形状は、方形柱状体を呈するものが一般的であるが、森垣外遺跡からは、携帯用の提砥石が数例みられる。朝鮮半島の墳墓や日本の墳墓の副葬品として同様な砥石がみられることから、朝鮮半島起源の砥石として考えうる砥石であろう。その他、魚網に付ける土錘（第3図21〜23）、装身具の集落内生産を示す緑色凝灰岩の原石（同24）、桃の種子（同25）などとともに軽石（同26）が出土しており、集落内での生業の実態を考えるうえで重要な資料群であるといえる。

なお、各地区からは相当量の製塩土器が出土している。和歌山県紀淡海峡付近から搬入された貝殻条痕を内面に有する個体や還元焼成の個体等が確認できる。また、第3図29に見られるように砲弾形を呈する大阪湾岸からの搬入品や、平行叩きを有する中部瀬戸内からの搬入製塩土器も見られる。製塩土器で得られた塩は、固形塩であり、食用、工作用、宗教的な儀礼用と用途もさまざまであるが、第2次A1地区では、馬歯を埋納したピットを検出していることから、馬の飼育が集落内で行なわれたことが想定できる。馬の飼育には塩は飼料として不可欠であるが、大量に出土する製塩土器が、それと密接に関係することも念頭に置かなければならない。(注4)

以上が、精華町森垣外遺跡の概要である。検出遺構や出土遺物には、朝鮮半島からの技

術系渡来人の集落内参入を示唆する資料が多くみられ、南山城地域では、類を見ない集落遺跡として認識することができる。

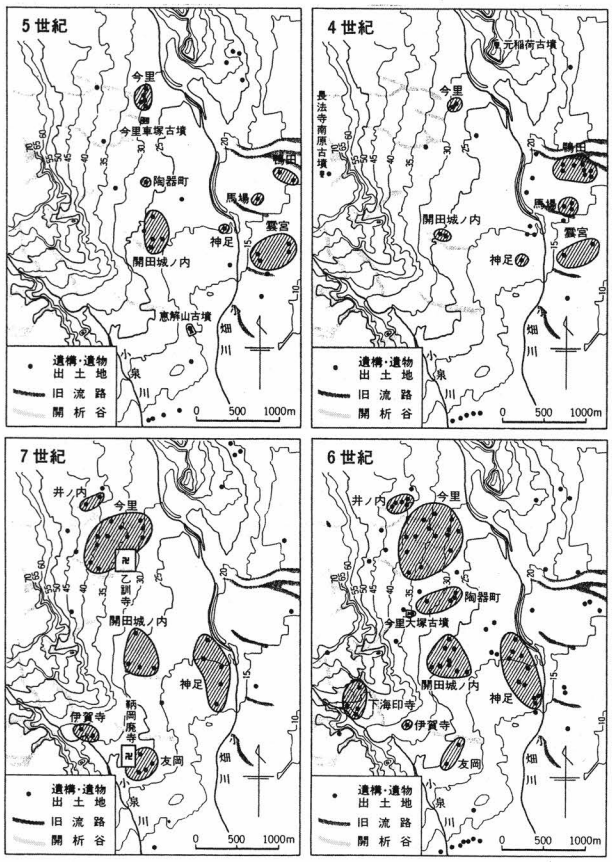
### ３．乙訓地域における集落動態

乙訓地域（第５図）は、古墳時代前期の元稲荷古墳のように前方後方墳を首長墓の主要な墳形として採用した地域であることから、弥生時代以来の農業生産を基盤にした在地勢力の自立的発展を首肯できる地域である。それらの背景には、桂川や小畑川によって形成された肥沃な地勢と密接な関係があるが、他方、木津川、宇治川、桂川の三河川が、淀川へと合流する地点の上流域でもあり、河川を介在とする広域な地域間交流を容易にした地理的条件も重要な要素として捉えることができる。

乙訓地域における古墳時代前期から後期にかけての集落の消長変化について、『長岡京市史』挿図（第５図）をもとに概観しておきたい。(注５)

先に述べたように、乙訓地域では、弥生時代から古墳時代にかけての集落の動態が、長岡京跡の下層の発掘調査として広域に把握されている。古墳時代前期における集落としては、鴨田遺跡、馬場遺跡、雲宮遺跡、今里遺跡、神足遺跡、開田城ノ内遺跡などがある。また、古墳時代中期になると徐々にではあるが、規模や各遺跡が有する属性においても相違が認められるが、前期集落の延長線上で捉えることができる。

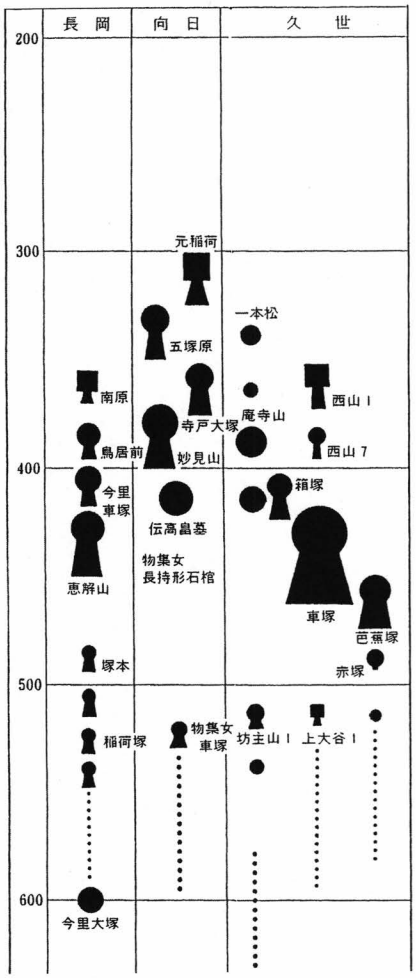
陶邑編年ＴＫ23型式から同ＴＫ47型式併行期を含む中後期集落は、今里遺跡、神足遺跡、開田城ノ内遺跡では、集落規模が拡大しており、各集落に何らかの内在的変化を認めることができる。各集落が大きく変貌する背景には、各集落における生産




第５図　乙訓地域における古墳時代集落の変遷（注５を転載）

力の向上を視野にいれる必要がある。一方、朝鮮半島系の遺物が多くみられる遺跡として今里遺跡があげられる。出土した土器とともに算盤玉形紡錘車の出土は注意すべきであり、同集落への渡来系技術者集団の確実な参入を想定することができる。しかし、大壁住居址などの遺構は検出されていない。

乙訓地域における古墳時代中後期集落には、古墳時代前期から継続して営まれた集落と初期須恵器段階に成立する集落に大別できる。前期から継続して営まれた集落には、鴨田遺跡、馬場遺跡、雲宮遺跡、今里遺跡、神足遺跡、開田城ノ内遺跡などがあるが、5世紀後半までは、大きな変化はみられず、この時点での渡来系技術者集団の集落内参入は想定し得ない。一方、古墳時代後期には、前期から継続して営まれる集落とともに、当該時期に出現する集落が認められる。その背景には朝鮮半島からの渡来系技術者集団の存在を想定することができる。




第6図　古墳編年表

## 4．集落の動態と古墳の変遷について

精華町森垣外遺跡と乙訓地域の古墳時代中期を中心とする集落の動態について述べてきたが、南山城地域では、5世紀後半に城陽市久津川車塚古墳に次いで芭蕉塚古墳が築造される。しかし、それ以後の大型前方後円墳は、築造されなくなる。一方、乙訓地域においても5世紀後半に長岡京市恵解山古墳が築造されて以後、大型前方後円墳の築造は、終焉をむかえている。一定の距離を有する両地域に共通する古墳の消長が確認できることは、各地域においての特殊な動態ではなく、両地域に共通する政治的な動きが存在したことを示唆している。当該時期の複数の集落では、森垣外遺跡でみたように朝鮮半島からの技術系渡来人の集落内の参入により生産力が急激に向上したと想定されるが、これは、各集落を統括する首長の台頭を意味している。かれら首長の台頭こそが、中期の畿内政権と地域首長の強固な政治的結び付きを解体せしめ、大型前方後円墳に象徴される政治的秩序の崩壊を促進し、ひいてはその象徴である大型前方

第７図　亀岡市里遺跡（竪穴式住居跡分布図と土器）

後円墳の消失に繋がるのである。換言すれば、畿内政権と地域首長下にある各集落が、技術系渡来人の参入により飛躍的な生産力を向上させたため、中間層にある地域首長そのものの存在が、政治的に終焉したと推測できる。(注6)

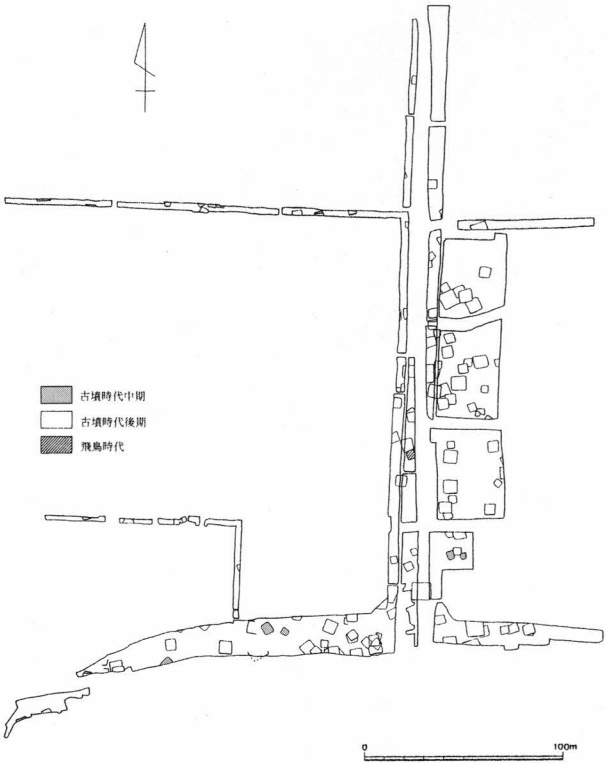
従来は、古墳の変遷という結果から古墳時代の政治的動向を推測し、畿内政権そのものを捉えてきたといえる。しかし、古墳の変遷は、古墳研究によっては解明されるのではなく、その背景にある集落研究によって解明されるといえる。

最後に、近年、発掘調査の事例が増加傾向にある京都府亀岡盆地におけるわずかな事例を紹介し、まとめにかえたい。

## ５．まとめにかえて―亀岡盆地における集落遺跡概観―

亀岡市旭町里遺跡（第７図）の発掘調査では、古墳時代中期から後期の竪穴式住居跡を約60基確認した。集落の存続時期は、５世紀後半から６世紀後半である。里遺跡で今まで確認できた竪穴式住居跡は、一辺が４ｍ～７ｍ、床面積は16㎡～49㎡の正方形の住居跡が大半であったが、５世紀後半の竪穴式住居跡136は、一辺が約８ｍ、床面積は64㎡と最大規模を有している。また、明らかに長方形の平面プランを意図した竪穴式住居跡158の建て替えであることから、住居跡158・136は、里集落内に複数存在したと考えられる有力家族の住居施設として認識できる。(注7)

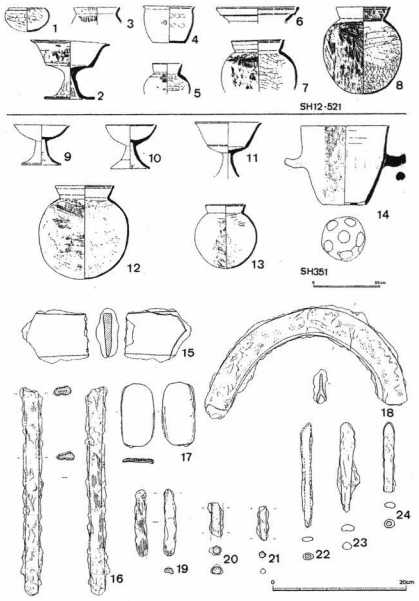
一方、里遺跡では、多数の土師器や須恵器などとともに、朝鮮半島の土器製作技法の影響を受けた韓式系土師器の甑や大阪府陶邑古窯址群産の須恵器、そして、大阪湾南部から




第８図　八木町池上遺跡（竪穴式住居跡分布図）

搬入された製塩土器などが出土している。これらの遺物群の絶対量は僅かではあるが、遠隔地との交易の一端を表している。

船井郡八木町池上遺跡（第８・９図）では、古墳時代中期から後期にかけての竪穴式住居跡群を確認している。竪穴式住居跡の規模は、25㎡～49㎡の床面積を測り、里遺跡とかわるところはない。しかし、出土遺物には、韓式土器を多く含み、小札などの鉄製品が出土している。集落が所在する一帯の地域開発に深く係わった集団を想定することができ、その背景には、直接間接をとわず、朝鮮半島から伝わった技術が大きく影響したことを示している。(注８)



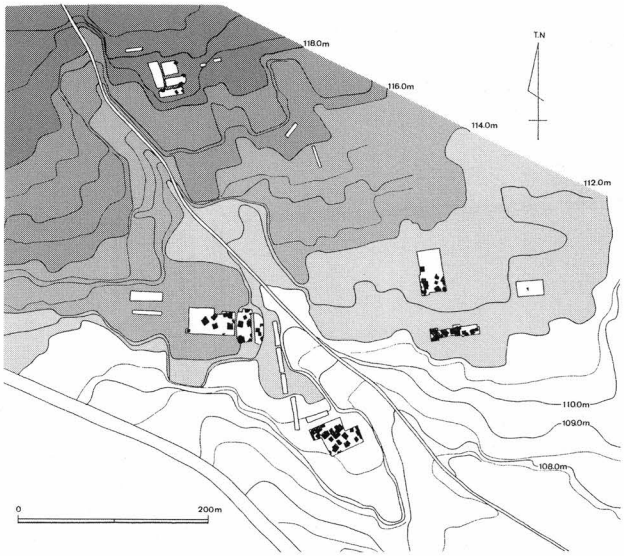

第９図　八木町池上遺跡（出土遺物）

亀岡市薫田野町鹿谷遺跡（第10図）では、５世紀末から６世紀後半にかけての竪穴式住居跡群を検出している。里遺跡や池上遺跡と同じく密集する状況で竪穴式住居跡を検出している。直接的に朝鮮半島の影響を示唆するような資料の出土はみられないが、大阪湾岸から紀北地域一帯の地域から搬入された製塩土器などが出土しており、地域間の交流を示す遺物が出土している。(注９)

これらの遺跡群は、同じ亀岡盆地内にあって、一定の距離が離れているにも係わらず、集落の消長変化など共通する要素が随所にみられる。今後は、当該地域における古墳の変遷とあわせ

て考察することにより、古墳時代の政治的状況を深く把握できるものと思う。

（こいけ・ひろし＝当センター調査第２課調査第１係長）



第10図　亀岡市鹿谷遺跡（竪穴式住居跡分布図）

注１　森垣外遺跡発掘調査概要は『京都府遺跡調査概報』第86冊、第91冊、第96冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）に掲載している。

注２　拙稿「土器を埋納する柱穴について」（『京都府埋蔵文化財論集』第４冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）2001

注３　拙稿「古墳中期における石製模造品について」（『古事』天理大学考古学研究室）2002

注４　拙稿「古墳時代中期における製塩土器研究の現状と課題」（『京都府埋蔵文化財情報第86号』（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）2002

注５　長岡京市史編纂室『長岡京市史』（長岡京市）

注６　小池寛「古墳時代中期集落の動態の古墳の変遷」（日本考古学協会第68回総会研究発表　2002年5月26日）

注７　小池寛・松尾史子「里遺跡第３・５・６次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第112冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）2004

注８　中川和哉「池上遺跡第12次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第108冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）2003

注９　野島永・河野一隆「鹿谷遺跡発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第52冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1993